

170. Counter-immunoelectrophoresis による癌患者血清中の Carcinoembryonic Antigen (CEA) の検出とその臨床的評価について

京都大学 放射性同位元素総合センター

浜田 哲

同 放射線科

石川 演美 鳥塚 莞爾

Carcinoembryonic Antigen(CEA) は、1965年 Gold 及び Freedman によって結腸及び直腸癌に出現する胎児性抗原であると報告されて以来、欧米では多数の研究がなされている。当初この CEA は、結腸及び直腸癌患者血清中にほとんど特異的に認められると云われたが、その後の研究では、それ以外の消化器癌及び非消化器癌並びに或る種の非癌疾患においても出現することが確められ、現在血液型物質の異型と考えられるに至っている。

我々は CEA に対する特異抗血清を用い、Counter Immunoelectrophoresis により80例の癌および非癌患者血清中 CEA の検出を行った。先ず患者血清の Perchloric Acid (PCA) 抽出液を陰極側ウエルに、CEAに対する特異抗血清を陽極側ウエルに入れて、第一回目の電気泳動を行い、生食水で十分洗ったのち、抗 γ -G γ -グロブリンを陽極側ウエルに入れて第二回目の泳動を行い、染色して判定した。結腸および直腸癌では27例中23例 (85%) に陽性で、そのうち8例 (30%) は強陽性であった。

その他の悪性腫瘍では、膵臓癌2例中1例強陽性、1例弱陽性であり、胃癌の5例中4例に弱陽性、肺癌15例中1例に強陽性、10例に弱陽性であった。これに対し、重症の肝硬変症の6例も全例弱陽性を示したが、正常者18例では1例が弱陽性を示すに過ぎなかった。以上のように強陽性例は結腸直腸癌に多く、又、例数は少ないが膵臓癌にも認められるところから、本法はこれら癌疾患の補助診断法として有用であると考えられた。